

中国語における空間の文法化に関する研究(初稿)

— “了<sub>1</sub>、了<sub>2</sub>”の文法的意味を中心に—

A Study of Grammaticalization about the Chinese Spatial Recognition

Especially on Particle *le*<sub>1</sub> and *le*<sub>2</sub> (1st.Ver.)

大島吉郎

OSHIMA Yoshiro

要旨：中国語における文法化 grammaticalization の動機付けは、主題として描写する対象を実体化、空間化するための手段であることを主張する。動詞“了”から機能語化した動態助詞“了<sub>1</sub>”は、現実空間における動作主の動作に実体化をもたらすことで、動作主が空間に存在し、ある何らかの事態を引き起こした、あるいは何らかの事態が引き起される事を客観的事実(存在)と見立てて描き、語気助詞“了<sub>2</sub>”は、現実に行っている事態(存在)を話者の視点からどう捉えているか、客観的認知の結果として陳述することを述べる。その根拠として“了<sub>1</sub>”は現場立脚型スキャニングの標識であり、“了<sub>2</sub>”は俯瞰型スキャニングの標識であることを提起する。

Key words：認知言語学 空間 文法化 “了<sub>1</sub>、了<sub>2</sub>” 個別的具象化 スキャニング

目次

0 はじめに

1 認知言語学的観点から見た「空間」の定義

1.1 存在

1.2 位置・方位

1.3 移動

1.4 方向

1.4.1 接近・離脱

1.4.2 多元的方向

1.4.3 開放・収束

1.5 視点

1.6 小結

- 2 名詞
  - 3 動詞
  - 4 客観的事実を述べる“了<sub>1</sub>”
    - 4.1 着点としての「完了」
    - 4.2 次の起点としての「実現」
  - 5 客観的認知的結果を述べる“了<sub>2</sub>”
    - 5.1 スキャニング（心的走査）
    - 5.2 “他吃了饭了。”
    - 5.3 “我学了三年汉语了。”
  - 6 おわりに
  - 7 余論
- 参考文献

## 0 はじめに

本稿は中国語における「空間の文法化」という観点から助詞“了<sub>1</sub>、了<sub>2</sub>”<sup>1</sup>の性質及びそれが担う文法的意味について述べようとするものである。本稿が述べる「空間の文法化」とは、本来個別の現実に即して名付けられたヒト、モノ、コトの名称がやがて総称化（個から類へ拡張）され、具体性を持たなくなっている状態を、ある何らかの文法的手段<sup>2</sup>を用いて、再び空間に位置付ける、すなわち特定の場面、文脈における個別の具体性を帯びた事象として表現することを意味する<sup>3</sup>。

本稿では文法化 grammaticalization<sup>4</sup>という操作にとって、「空間」概念の占める位置、及ぼす影響が極めて重要であり、言語と空間両者の関係を考えることが中国語文法における根幹的諸問題の解決にとって有効であり、決定的な役割を果たすことを結果的に述べることになる。中国語における文法的手段とはすなわちカテゴリー化された類を空間化（個

<sup>1</sup> 一般に“了<sub>1</sub>”は主に動詞に接辞する動態助詞を指し、“了<sub>2</sub>”は文末に置かれる語気助詞を言う。例えば、“我吃了<sub>1</sub>饭了<sub>2</sub>。”（わたしは食事を済ませた。）

<sup>2</sup> 例えば名詞であれば数詞、量詞の修飾を受ける、重畳型を形成する、動詞であれば動作量、動作の時間量を示す、動作の方法・様態、動作の行われる場所、時間を介詞構造によって示す、重畳型を形成するなど。重畳型の形成については、それが「文法化」の範疇に含まれるか否か別途検討する必要がある。

<sup>3</sup> ヒト・モノ・コトなど事態に対する話者の認識を個と類に分けて考えることが有効であろう。中国語においては認識の対象を個と見るか、類として扱うかの相違は文法的手段とともに、発話の段階、文脈、場面によって理解することが求められる。

<sup>4</sup> 辻幸夫編（2013:331-332）参照。「文法化とは、内容語（動詞や名詞など語彙的内容を持つ要素）が機能語（語彙的内容が希薄な助動詞や前置詞・助詞など）に通時的に変化することを言う。文法化とは、伝統的な区分で言えば、歴史言語学で扱われる現象であるが、変化の過程に比喩、推論、主観化などの認知メカニズムが作用することから、認知言語学の研究者が積極的に取り組むようになり、文法化を射程に入れることで、認知言語学も研究対象を言語の動態的側面に広げるようになった。」中国語の「文法化」については盧滄（2000:59-74）参照。

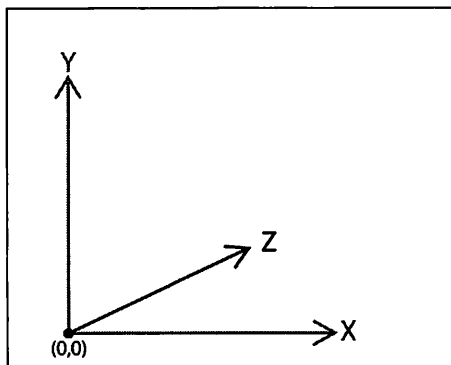
体化、個別化) するための「空間のメタファー」であると換言することが出来る。

## 1 認知言語学的観点から見た「空間」の定義

自然界における「空間」<sup>5</sup>は、意識（認知作用）の主体であるヒト（身体）が存在するために必須の基盤であり、認知の対象となるすべての要素が存在するための前提としてアプリアオリ<sup>6</sup>に存在する<sup>7</sup>。

物理的空間は基準点<sup>8</sup>を基に設定された「縦 Z・横 X・高さ Y」（図 1 参照）を軸とする三次元構造であることは言うまでもないが、ヒトの認知というフィルターを通した、認知意味論としての「空間」を定義するためには、まず「存在」とはどのような意味なのか、その概念を明らかにしておかねばならない。次に存在するヒト・モノ・コトを客観的に示すための根拠として必要とされる位置・方位、移動と方向、視点の設定について規定して行くことにする。

図 1 三次元としての空間



### 1.1 存在<sup>9</sup>

「存在」は「発生・存在・消失」というプロセスにおける一つの相対的な過程として捉えることができる<sup>10</sup>。「発生」を前提とし、やがて「消滅」へと向かう過程をたどってい

<sup>5</sup> 客観的な「物理的空間」と称することも出来る。メタファーmetaphorとしての「心理空間・脳内空間」、「社会的空間」の存在が指摘される。「容器」、「導管・パイプ」を空間に対するメタファーとする考えもある。

<sup>6</sup> a priori：演繹的な推理などの経験的根拠を必要としない性質（『広辞苑』第6版1988:60より）。

<sup>7</sup> 認知言語学では身体を認知の基盤として規定する。本稿は、中国語において身体が存在するための空間が認知の根源的基盤であることを主張する。

<sup>8</sup> 発話、あるいは談話構造においては、この基準点を「話者の視点を起点とする」と規定することが出来る。「現実の空間」を見ている話者の意識は、図1における(0,0)に「起点」として初期設定、定位されていると考えられる。

<sup>9</sup> 話者・聞き手にとって、ヒト・モノ・コトの存在を前提とする「所在」とは区別して用いる。

<sup>10</sup> 「発生・存在・消失」は意味要素 [+発見] [-企図] を有し、[-発見] [+企図] の意味素を有す

る状態、途中経過とも表現できる<sup>11</sup>。

ヒトが存在するための基盤である「空間」も、ヒトの認知レベルを超えた宇宙誕生の段階において発生し、存在しているものと考えられるが、この空間がなぜ、どのように「発生」したかについては問わない。

我々認知の主体であるヒトは、乳児が生まれ、子どもから大人へと成長し、老齢期に達するとやがて生命を終えることによりこの世から消滅することを経験的に理解することで、生きとし生けるすべての存在が生まれては、やがて消滅するという一つのサイクルを形成していることを言語集団共通の認識として来たものと考えられる。

そこで、事態の「発生・存在・消失」に対するヒトの認知には二つのタイプがあることを先ず整理しておかねばならない<sup>12</sup>。

① 眼前の状況・事態が話者にとって（初めて認識される）未知の情報であることを伝達する：聞き手にとって未知の情報であるか否かは問わない。

(01) 桌子上有一个苹果。

(02) ??桌子上有一个苹果，你吃吧。

例(01)はテーブルの上にリンゴが一個置かれている事を知らない（認識していない）状況下で事態を把握しての発話として成立する。テーブルにリンゴが置かれているという事態を把握していないのに“你吃吧。”（どうぞ召し上がれ。）と聞き手に勧めるのは文脈上の飛躍があり唐突であることから、何らかの事情で咄嗟の機転を利かせた発話であったとしても、例(02)が不自然な発話と感じられるのは、このような理由による。

② 眼前の状況・事態、あるいはあらかじめ確認されている状況・事態が、聞き手にとって未知の情報であることを伝達する：話者にとっては既知の情報。

(03) ??桌子上有一个苹果。

(04) 桌子上有苹果，你吃吧。

---

る「産出・所在・消化」と対比して相対的に位置付ける必要がある。

<sup>11</sup> 「存在」にも「物理的存在」とヒトの認知を経た「存在」がある。物理的に、あるいは抽象的に存在していても、知覚による認知の手続きを経なければ存在しないに等しい。これは自然現象において顕著に見られ、例えば降雨がその例であり、雨が降り始め、ひとしきり降った後に止んで、何ら形跡を残していない場合、話者にとって、この降雨は当初から存在していないことになる。水たまりが残っている、あるいは地面がぬかるんでいるのを見て降雨があったことを推測することで、降雨という現象の存在を認知する（例えば“下过雨了。”という表現によって表される）。認知の段階を追って見ると、例えば“要下雨了（将然）/下起雨来了（開始）/下着雨呢（進行）/不下雨了（完了）/下过雨了（歸結）”のように整理することが出来る。

<sup>12</sup> 木村英樹 2011、大島吉郎 2014 参照。

話者はテーブルの上にリンゴが置かれていることをあらかじめ知っているが、聞き手にとってはこの事態が新情報であり、話者と聞き手が情報を共有していない場合での発話として成立するのが例(04)である。例(03)は①の発話であるため、話者の置かれている状況と合致しないため不自然な感じを与える。

例(04)の“桌子(上)”は既知の情報として共有されているため、眼前でもよいし、どこか別の離れた場所であっても文は成立する。“苹果”は話者には個 specific であっても、聞き手にとっては新情報であるため類(総称)として認識される。木村英樹 2011、2017 は①を「知覚的存在文」、②を「知識的存在文」と名付け区別する。「知覚的」とは、「話者にとって知覚された新情報に基づく発話」の意に解され、「知識的」とは「話者にとってはすでに知覚され知識として獲得されているが、聞き手には認知されていない新情報に基づく発話」の意であると解釈することが出来る。

③ 話者、聞き手双方が事前に認識し、情報を共有している事物、状況、事態が話題として取り上げられ、その在り処を述べる。

このケースでは動詞“在”を用い、語順も①、②とは異なることは改めて説明するまでもない。例えば、

(05) 苹果在桌子上，你吃吧。

例(05)の“苹果”は数詞・量詞を伴わないが総称(類)ではなく、話者、聞き手双方にとって文脈・場面上から特定(指示)される個としてのリンゴである<sup>13</sup>。一旦、実体として提起された個は文法的手段としての数詞・量詞の支えを必要とせずに特定のヒト・モノを指す<sup>14</sup>。それでもなお数詞・量詞を用いた場合は、実数(あるいは虚数<sup>15</sup>)を表すことになる。

話者・聞き手双方にとって既知のヒト・モノ・コトはトピック(主題)として主語の位置に置かれ、コメント(陳述)の対象となる。この語順は、根拠のしっかりした既知の情報が主題として提示され、続いて新情報について陳述するという中国語の情報構造の原則

<sup>13</sup> あらかじめ認知されているのであれば単数、複数いずれのケースも有り得る。

<sup>14</sup> 介詞“把”による取り立てが可能である。“把”字句はその典型である。例えば、“请你把书带回来。(本を持ち帰って来てください；筆者訳。)”(《汉语水平等级标准与语法等级大纲》国家对外汉语教学领导小组办公室汉语水平考试部编・1996年・高等教育出版社)“把”字句の名詞に数詞・量詞を修飾語として添えると、特定の個に対する実数を表すことになる。例えば“他把一幅自己画的画儿展开在我们面前。”(彼は自分で描いた1枚の絵を私たちの見ている前で広げて見せてくれた；筆者訳；《汉语动词380例》吴叔平编著・2000年・华语教学出版社)

<sup>15</sup> “两”は「虚数」の典型であると言えよう。例えば“过两天再说/我跟你说两句话”(《现代汉语词典》第7版:815)。“两天”は「数日後」、 “两句话”は「少しばかり、ちょっと」の意であり、控えめな数を提示することで聞き手に押しつけがましくない印象をもたらす。

に沿ったものである<sup>16</sup>。

## 1.2 位置・方位

ヒト・モノが存在していることを前提に、空間における所在を示すためには、自己あるいは対象 *trajector*/*target* を相対化して、目印となる参照点 *landmark* を設ける必要がある<sup>17</sup>。座標軸上の参照点「前後・左右・上下」（“前/后・上/下・左/右”）に加え、「内<sup>18</sup>・外」（“里/外”）を加えることで、タテ・ヨコ・高さを軸とする空間に座標を設定し位置付けが可能となる。この「前後・左右・上下・内外」の位置関係は相対的であり、話者（自己中心的視点）・聞き手の視点がどこに置かれるか、誰の視点に立つか、さらには体の向きを変えることによって対象と参照点との位置関係も一定ではなく、自ずと変化する。それゆえ話者と対象は「相対的位置関係」にあると言うことが出来る<sup>19</sup>。これに対して「方位」である「東西南北」（“东/南/西/北”）は話者の視点に制約されることなく位置関係を示すことから「絶対的方位」と称することが出来る<sup>20</sup>。

## 1.3 移動

ヒト・モノは必ずしも一点に留まらず、空間を移動する。「移動」とはどのような概念を示すのか相対的意味関係を明らかにしておかねばならない。

ヒト・モノが所在する地点を離れる場合、所在する位置は「起点」となり、「経路」を経て「着点」へと向かう。「着点」は新たに「起点」として認知されることで、次の移動のサイクルを形成し、このサイクルは、対象の「消滅」に至るまでの間、観察者の認知の及ぶ限り無限（と思われるほど）に繰り返される。「起点」は「着点」を前提として「経路」を含意すると考えられる。同様に、視点を「着点」に置いた場合、「起点」を前提として「経路」を含意する。「経路」は視点によって「起点」を含意する場合と、「着点」を指向する場合とが想定される。例えば、

(06) 去邮局怎么走？（郵便局へはどう行けばいいでしょうか：筆者訳）

例(06)の“邮局”は位置移動動詞“去”の場所目的語であり、到達を目指す「着点」を

---

<sup>16</sup> 盧澣（2000:61-63）は中国語の特徴の一つとして「VO と OV の混在型言語」を挙げる。

<sup>17</sup> 原初の発話、例えば物語の導入に当たっては、話者の視点を基準として時間、場所を定位することになる。例えば、“很久很久以前、…”は話者の視点を起点として時間、空間を設定する。

<sup>18</sup> 「内」は空間に対する「容器」、「導管・パイプ」のメタファーであり、このような参照点設定の有りようは開放性空間に対する閉鎖性空間として捉えることが出来る。

<sup>19</sup> ガイ・ドイッチャー（2022:271）は「自己中心座標」と称する。

<sup>20</sup> 木村英樹（2017）参照。この「絶対的方位」という考え方も認知的営為（見立て、見做し）にほかならず、北斗星が天空の中心に位置すると認定することで相対的に方位が決定されたのであって、太陽と月の運行による東西の軸は四季によって変化するため、その認定に当たっては専ら天体観測に依らざるを得ないという点においては、限定的「絶対」であると言えよう。ガイ・ドイッチャー（2022:272）はこれを「地理座標（地理的方位）」と称する。

表す。その「着点」に至る経路を尋ねるのが“怎么走”であり、“走”は動作主が「起点」を離脱して、「着点」までの道筋、移動経路を「たどる」ことを意味する移動動詞である。“去”と“走”は「起点・経路・着点」というプロセスにおいて意味の上で重複、矛盾することなく、相補的關係にある故に例(06)の文が成立している<sup>21</sup>。

#### 1.4 方向

空間に存在するヒト・モノの移動には当然の事ながら「方向」が発生する<sup>22</sup>。「方向」は座標軸上に起点と着点を結んだベクトルであると規定される。視点を座標軸の中のある一点に起点として据えると、単純な二次元的方向と、三次元における多元的な方向とが考えられる。単純な方向は「到達」／「接近・離脱」<sup>23</sup>であり、多元的方向は「前後・左右・上下」<sup>24</sup>、「開放・収束」である。「内・外」は位置関係を示す「方位」に参照点（指標）として有効であることから、中国語ではこれまで一般的な「方向」と考えられて来ているものの、座標軸の中に容器、あるいは導管・パイプを置いた状態での「方向」と考えることが出来ることから、「前後・左右・上下」と同じ範疇ではないことが明らかである。「前後・左右・上下」をプロトタイプ（原形）とすれば「内・外」はそのメタファー（隠喩）という関係として捉える事が出来る<sup>25</sup>。

##### 1.4.1 到達／接近・離脱

話者に視点を据える「到達」／「接近・離脱」は方角・方向を限定せず、全方位に対して、動詞「来・去」／“走”を補語として用いることによって表される。動詞「来・去」の基本義は、移動主体の「目的とする地点、場所への到達」であり、“来”と“去”は対

<sup>21</sup> 日本語では“去”“走”ともに「行く」と訳され、経路、着点が区別されない。“怎么”について考えてみると、「手段・方法」を尋ねる意味と、「原因・理由」を問う意味に分かれるが、「経路」は「手段・方法」との関連性が強く、「着点」は「原因・理由」との意味のつながりが想定される。「手段・方法」は「経路」のメタファーであるのに対し、「原因・理由」は「着点」及び「起点」のメタファーであるとの結論が推測される。「因果関係」は「因」が起点、「果」が着点のメタファーであることが推定される。“怎么”は「因」を問うのか、それとも「果」を問うのかで指向が変化する。日本語の「どうして」、英語の how にも同様の現象が見られ、基本的スキーマの共通性が指摘される。“怎么”の意味をどう弁別するかについては、例えば、“他怎么去开会了/呢/的?”では語気助詞“了/呢/的”が弁別素としての機能を担う。

<sup>22</sup> 「絶対的方位」に基づく“东南西北”を「方向」とした場合、「絶対的方向」と称することが出来る。

<sup>23</sup> 木村英樹 2017 は“来/去”を「主観的方向動詞」と規定する。直線的な方向とは限らない。

<sup>24</sup> 木村英樹 2017 はこれに「内・外」を加えた“进出・上下・过回・起”を「客観的方向動詞」と規定する。

<sup>25</sup> 「内・外」は容器、導管・パイプへの出入りを意味することから、位置移動を表しており、容器、導管・パイプが「前後、左右、上下」どの位置にあっても問題にならない。呂叔湘 (1944:132) は“进/出”について“12·81 ‘上’‘下’‘进’‘出’等字，本来是动词，用在别的动词和处所词之间，又成了关系词，上文已见(12·51,54)。不和处所词合用而单独粘附在动词之后，作为丙级词，这些字又有表示动作的趋向或势力的作用。”と述べ、“进/出”が「動作の方向あるいは力の及ぶ様を表す働きを有する」と指摘している。張志公 (1956:19) は“14. 趋向动词 趋向动词是动词的另一个附类，包括‘来、去、上、下、起、过、回、开、上来、下来、起来、回来、回去’这些表示趋向动词。”と述べ、“进/出”を含めていない点が注目される。

義関係にある。「接近・離脱」はこの基本義の派生義、派生的用法と位置づけられる。話者の視点に立てば“来・去”はいずれも起点、経路、着点を含意する<sup>26</sup>。

(07) 你先去吧，我等一会儿就来。<sup>27</sup>（先に行ってよ、後からすぐに行くから：筆者訳）

(08) 他去了还没有半个月就回来了。<sup>28</sup>（彼は出先に行ってから半月も経たないうちに  
戻って来た：筆者訳）

例(07)の“去”は話者と聞き手があらかじめ確認している特定の場所への移動（起点からの離脱と着点到達）を意味する。“我等一会儿就来”の“来”は、話者が聞き手の視点に立って話者の移動を述べる語用論的配慮表現であると考えられる。日本語ではこのような“来”に相当する表現が無く、この文脈では「行く」と訳す以外に方法は無い。例

(08)は話者の所在地を中心に、“他”が目的地との間を往復した経緯が述べられ、経路に関する情報は伝えられないものの、“回来”という語句を使用することで起点、経路、着点の一つのまとまりのある空間として捉えられていることが明らかである。

#### 1.4.2 多元的方向

着点がどこに置かれているかによって、起点との間に「前後・左右・上下・内外」のベクトルが設定され、話者、聞き手にそのベクトルが認知される。視点が話者、あるいは聞き手のものかによって「接近・離脱」義が加味されることで、ベクトル表示は交代する。

(09) 这儿比刚才走过的地方危险多了。<sup>29</sup>（この場所は先ほど通った所より随分危ない：筆者訳）

(10) 一位老太太走过来问我：“医院在哪儿？”<sup>30</sup>（そうこうしているうちに、ある老婦人がこちらに歩いてやって来て「病院へはどう行けばいいかしら」と私に尋ねた：筆者訳）

(11) 那个人从我面前走过去以后，又反过来回头看了我一眼。<sup>31</sup>（その人は私の目の前を通り過ぎると振り向いて私のことを一瞥した：筆者訳）

---

<sup>26</sup> 動詞“走”は派生義として「所在地からの離脱」を表すが、話者の視点からの「方向」を表すものではない。“走”は文脈によって「起点」、「経路」、「着点」を表すことの出来る稀有な動詞であり、なぜそのような意味を持つようになったのか、歴史的経緯、また方言との関係からの考察が求められる。荒川清秀 1979、高橋弥守彦 2022 参照。

<sup>27</sup> 《基础汉语》下册、1972年商务印书馆。

<sup>28</sup> 《实用汉语课本》第三册、1986年商务印书馆。

<sup>29</sup> 《实用汉语课本》第三册、1986年商务印书馆。

<sup>30</sup> 《走进中国(初级本)》杨德峰・黄立编、1997年北京大学出版社。

<sup>31</sup> 《汉语中级教程》第二册、1989年北京大学出版社。



例(09)の“走过”の視点は“来／去”を伴わないため中立である。例(10)“走过来”は対象が話者のいる位置への移動、接近、到達を表し、例(11)“走过去”は対象が話者の前に到達し、通過、離脱する位置移動のあり様を描写する<sup>32</sup>。

#### 1.4.3 開放・収束

「開放」はある一点を起点として、特定のベクトルを持たない全方向への発散、開放を意味し、動詞“開”を補語として用いる。「収束」はこれとは対称的に、ある一点を着点として全方向からの集中、収束を意味し、動詞“起”を補語として用いて表す。座標軸上の単純なベクトルとは性質を異にするのは明らかであり、“起”は方言を除き“来”としか結合しない特徴を有する。

(12) 关于他的事已经传开了。<sup>33</sup> (彼の事は誰もが知るところとなった：筆者訳)

(13) 把东西都收拾起来。<sup>34</sup> (品物を全部きれいに片付ける：筆者訳)

例(12)は仮想の社会的空間への情報の拡散、伝播を意味し、視覚的に捉えられない抽象的方向を表しており、“開”の「分離」義が拡張したものとして整理することが出来る。例(13)は空間(容器のメタファー)に分散しているモノを整然とした状態に変化させることを表しており、開始、経過、帰結のプロセスが含意されている。

“開”“起来”のいずれも「開始」義を有する<sup>35</sup>。経路、着点の状態が分散か収束かという点においてこの両者は対義的であり、いずれも認知のフィルターを通してることが明らかである。

#### 1.5 視点

視点には話者、聞き手、中立的な第三者からの3タイプが考えられる。動詞によっては、話者の発話がすべて話者を中心とするとは限らない語も見られる。例えば「ヤリモライ」を表す動詞、動詞句においては「ヤル」、「モラウ」の主体、客体は文脈において決定される。

(14) 上课 (主体：授業を始める 中立：授業が始まる 客体：授業を受ける)

(15) 看病 (主体：診察する 客体：診察を受ける)

<sup>32</sup> “反过来”は一旦反対方向を向いた体を聞き手の方に反転させる動作を表し、“过来”は「位置移動」をプロトタイプとする「回転」義と解することが出来る。

<sup>33</sup> 《汉语动词用法词典》孟琮・郑怀德・孟庆海・蔡文兰编、1999年商务印书馆(pp.62)。

<sup>34</sup> 《汉语动词用法词典》孟琮・郑怀德・孟庆海・蔡文兰编、1999年商务印书馆(pp.337)。

<sup>35</sup> 「開始」義を表す位置移動動詞には“上”を含める辞典も有る。例えば小学館『中日辞典(第3版)』(2016:1356)は「方向補語“-上”の用法」[\[5\]](#)において「動作や状態が開始され持続されることを表す」と記述し、“他俩聊上了天儿了/会还没有开,大家就议论上了/最近又忙上了”などの例を上げる。

(16) 借钱（主体：お金を貸す 客体：お金を借りる）

(17) 我给你（きみあげる） / 你给我（わたしにくれ）

視点にも「起点、経路、着点」の要素が反映することが明らかである。

## 1.6 小結

空間は物理的空間、認知意味論的空間、社会的空間の三つに分けて考えられる。ヒトが見ている空間は現実の物理的空間でありながら、実際には話者の認知的操作（フィルタリング）を経た認知意味論的空間がオーバーラッピングしている。

物理的空間には絶対的位置関係、方向性は存在しないが、話者を起点として、話者と聞き手、第三者の視点を相対的に示す必要性から、位置・方位、接近・離脱、移動の方向を表す記号（情報）が言語化され、文法化の方向をたどったものと考えられる。

## 2 名詞

個別の言語は最初、小規模集団ごとに発生し、集団の拡張、融合、拡大、分離を繰り返す中で、多様性、多機能性、効率性を獲得して言語集団を形成して来たものと考えられる<sup>36</sup>。

モノの「名付け」という行為により名詞が発生し、個々の名詞は当初身の回りの個別の、ある特定のモノを指すことで事足りていたのが、行動範囲の拡大、集団の拡張に伴い、モノのパリエーションが増えることにより、名詞が指す対称は個から類へと性質を変えて行ったプロセス（カテゴリー化）が想定される。ある一つのモノが多様性を増し、類へと抽象化の度合いを高めて行った結果、モノを個別に指示するために指示詞、類別詞（量詞）を必要とする動機付けが生まれたのであろう。

現実の空間に存在する「個」（specific / “特指”；例えば“一个苹果、这个苹果、我的苹果”）には話者、聞き手にとって実体性が伴う（有界）のに対して、「類」（generic / “虚指”；例えば無標の“苹果、橘子、西瓜”）は実体性の喪失を引き換えに抽象化を得ている（無界）と言えるであろう。言語は文脈によって「個」と「類」の間を行ったり来たりする性質を有するとしたら、「個」の実体性を担保する手立て（文法的枠組み）が必要であり、同様の事は「類」に対しても「実体性」を消し去る手立てが求められる。大河内康憲 1985 における「個体化」の議論とは、「類」である名詞の「実体化」、すなわち現実の空間にモノを存在せしめる「空間化」にほかならず、ヒト、コトについても同様の考え方が成立するはずである。

---

<sup>36</sup> 進化の法則に従えば、言語環境に順応、適応できる個体が生存し、世代交代を経ることで集団をより強固なものへと発展させて来た経緯が推測される。言語処理を司る中枢が大腦皮質に存在するとすれば、ヒトにとって言語運用能力、言語獲得能力は、ヒトの進化の過程で環境に適応した個体によって形成された遺伝的獲得形質であることが理解される。

空間における実体を伴わない抽象的概念を表す名詞は「個」ではありえず、そのような名詞は成立当初より「類」であることが理解される。このような抽象的概念を表す「類」としての名詞が成立するには、脳内空間に概念の存在が確認される必要がある。例えば“意思”は個別の「意味」を表さないことは明らかであり、抽象的であるからこそ汎用性が高いと言える。対象を「個体化」するには「指示代詞＋数詞＋量詞」構造の修飾を受けることにより、例えば“这个意思”のように表現することで、個別の意味を指すことが可能となる<sup>37</sup>。

### 3 動詞

モノの名付けが行われるのに平行して、個別の単純な動作、主に身体部位を中心とする動作性の強い具体的な動作<sup>38</sup>についても言語集団の形成に並行して名付けが行われたことが推定される。モノとは異なり、動作は連続的、総合的な動きを伴うため、高度なゲシュタルト性によって動作が認識される必要がある。個別の名付けが、やがてゲシュタルト性の確定とともに個別性を失い、類へと拡張して行ったプロセスは名詞と変わらないものと考えてよい。このような観点から、文法的手段による「個体化」の操作は名詞とともに動詞にも必要とされる。

「個体化」とは現実の空間に存在する、あるいは存在した事態であることを示す手立てであり、この観点から中国語の品詞を見ると、実詞の中で実体としての存在を認め得るのは名詞と動詞であることが明らかとなる。厳密な基準による「実詞」の判定を行うと、動詞は名詞の存在を前提とすることから、名詞が唯一該当することになる。

### 4 容観的事実を述べる“了<sub>1</sub>”

“了<sub>1</sub>”の基本的な意味を《現代汉语辞典(第7版)》(2016:pp.788)によって確認することにしたい。

- ①用在动词或形容词后面，表示动作或变化已经完成。a)用于实际已经发生的动作或变化：这个小组受到～表扬 / 水位已经低～两米。b)用于预期的或假设的动作：你先去，我下～班就去 / 他要知道～这个消息，一定也很高兴。

---

<sup>37</sup> 話者と聞き手の間で一旦文法的手段によって個体化された対象は、文脈の中で無標化される。現実の空間ではなく、認知的脳内空間において実体化されると、標識を必要としないからであると考えられる。

<sup>38</sup> 「単純」であるとか、「具体的」をどう認識するか認知のプロセスは「ゲシュタルト性」に依らざるを得ない。ある一つのイメージをして捉えられる動作は、ゲシュタルト性に基づく認知の働きに外ならず、動作の名付けの初期段階においては個別性を有していたことが名詞の場合と同様に推測される。

同書は基本義を“表示動作或变化已经完成”と記述するが、“完成”には“動作完成 / 变化完成”と二つの意味が併記されており、それぞれ「(動作の) 完了」と「(状態変化による新たな状態の) 実現」に理解される。「完了」は「すでに存在する対象」<sup>39)</sup>に対する「量的消化」(例えば“他擦了几根火柴, 才点着了烟。”<sup>40)</sup>)と、何らかの行為が行われた結果、叙述の対象(ヒト・モノ・コト)が「出現」あるいは「産出」され存続することを意味する。

a) “这个小组受到了表扬。”の例は、評価・賞賛を受け終わったのではなく、評価・賞賛を「受けるに至った」事象を事実として述べ、評価・賞賛の事実は結果として存続する事を含意する。“水位已经低了两米。”は水位が徐々に下がり、話者が観察した時点で、あるいは最終的に2m下がった(結果として変化が生じた; 「(人為的に) 変化を生じせしめた」ではない) 事象を事実として述べ、水位が下がり始めて2mまでに到達し、そこで止まった状態が持続する事を含意する。2例共に記述される内容は事実に基づく事象であり、話者の主観を差し挟むものではなく、聞き手にも共通に認識される客観的事実を述べている<sup>41)</sup>。

b) “你先去, 我下了班就去。”は「予期された、あるいは仮定の動作に用い」られ、未来のある段階における「(動作の) 完了」を表す。“下了班”は発話の時点では「未然/未実現」であるが、文脈指示の時点では「已然/実現」である事を想定している。“他要知道了这个消息, 一定也很高兴。”も発話の時点では「未然/未実現」であるが、文脈指示の時点、この場合「過去」と「未来」いずれのケースも考えられる。話者の認知的心理空間ではいずれも「已然/実現」が既定の現実として想定され、複文の前段に用いられている。この2例に共通するのは、数量表現(動量補語、時量補語)を伴わない(動作量が数値化されていない)事である。

#### 4.1 着点としての「完了」

「完了」を空間(起点、経路、着点)のメタファーという観点から捉えると、「完了」義は起点、経路の存在を前提とする「着点(到達点)」に相当する。

空間：起点 経路 着点

時間：開始 進行 完了

移動1：動き出し 移動中 到達

<sup>39)</sup> 「すでに存在する」は、1)現実の空間に実体として存在する、2)認知的心理空間に認識として存在する、の意に用いる。話者の見立て差異は「已然/実現、未然/未実現」として有標化する。

<sup>40)</sup> 《汉语动词380例》吴叔平编著、2000年华语教学出版社(pp.12)。

<sup>41)</sup> “这个小组受到了表扬。”の“了”は「消費」ではなく、受け取ったものが最終的に“表扬”であると確認されたと考えれば、「産出」のカテゴリーに属すると言えよう。賓語“表扬”はこの例では「結果賓語」に分類される。

移動 2 : 出現 接近 到達／離脱 離遠<sup>42</sup> 消失

視点 (視線) : 経過観察に伴うスキャンニング

着点であることを示す (確定する) には、経路についての情報 (根拠) が必要とされ、移動に要した距離、時間量の客観的データが着点に至る根拠となる (例えば “走路／走了路／走了一段路”)。「完了」義にとっては「経路」に相当する「進行」として動作量、時間量が発生する。“了<sub>1</sub>”が動作量、時間量を伴った場合、観察者が動作の開始から、途中経過、完了までをあたかも目で追っているかのようなスキャンニング (心的走査) が実行されることにより事実確認を経ることから、構造的に「已然」であることが示される。例えば “已经” のような「已然」のマーカーが示されず、「着点」に至るまでの動作量、時間量が明示されない文は、現実の空間における動作の存在が確認されないためスキャンニングの有無が確定されず、聞き手にとって「已然／未然」は未確定である。例えば、

(18) 我们吃了饭再走吧。

(19)?? 我们吃了一顿饭再走吧。

例(18)は “吃了饭” の部分に動作量、時間量が示されておらず、「已然／未然」 (あるいは「過去／未来」) のいずれであるかは後接成分 “再走” によって決定されている。これに対して例(19)が不自然となるのは “一顿” によって「已然」情報が示されているにもかかわらず、後接成分 “再走” が「未然」を示すため、事実関係に矛盾が生じてしまうためである<sup>43</sup>。

#### 4.2 次の起点としての「実現」

「1.3 移動」で述べたように、一旦示された着点は次の行動の新たな起点となる。ある過程を経て最終的に何かを (能動的に) 産出した、あるいはモノ、コトが (意図せず結果として) 産出された事実を述べるのが “了<sub>1</sub>” のもう一つの意味である。産出されたモノ、コトは産出された瞬間から、動作・行為の結果として存続して行く。

(20) 我们组织了一个业余活动小组，加深了同学们之间的了解<sup>44</sup>。

(21) 他在门前的空地上培养了一小片芍药<sup>45</sup>。

<sup>42</sup> 「接近」の対義語として用い、「ある場所から離れて遠くなる」の意。

<sup>43</sup> ネイティブによっては可とするケースも見られるのは、“等我们吃了一顿饭再走吧。”のように“等”を文頭に補って解釈することで「未然」が示され、不自然さが解消されるからであると考えられる。

<sup>44</sup> 《汉语常用词用法词典》1997年北京大学出版社 (pp.1047)。

<sup>45</sup> 《汉语常用词用法词典》1997年北京大学出版社 (pp.667)。

例(20)は“组织”という活動を継続して行った結果、課外活動のサークルを一つ立ち上げた事を述べる。立ち上げのプロセスは完結するものの、産出された“业余活动小组”は存続することになる。例(21)は玄関の脇にあるちょっとしたスペースにシャクヤクを植えて、それが“一小片”(ほどほどの面積)になるまでに育っている事を述べる。いずれの例も“了<sub>1</sub>”によって何らかの動作・行為がある段階(着点)に達した後何かが生み出され、その何かが存続することを示す新たな状態の起点となるのである。よって“了<sub>1</sub>”には二つのタイプが有ることが分かる。

了<sub>1</sub>A: [+消化] [-産出] [+着点] [-起点]

了<sub>1</sub>B: [-消化] [+産出] [+着点] [+起点]

<了<sub>1</sub>B>

空間: 起点 経路 <着点 ⇒ 次の動作の起点>

時間: 開始 進行 <完了 ⇒ 結果の持続>

## 5 主体的認知の結果を述べる“了<sub>2</sub>”

“了<sub>2</sub>”の基本的な意味を《現代汉语辞典(第7版)》(2016:pp.788)によって確認することにしたい。

②用在句子的句末或句中停顿的地方,表示变化或出现的情况。a)表示已经出现或将要出现某种情况:下雨~/春天~,桃花开~/他吃了饭~/天快黑~,今天去不成~。b)表示在某种条件下之下出现某种情况:天一下雨,我就不出门~/你早来一天就见着你~。c)表示认识、想法、主张、行动等有变化:我现在明白他的意思~/他本来不想去,后来还是去~。d)表示催促或劝止:走~,走~,不能再等~/好~,不要老说这些事~!

同書は“了<sub>2</sub>”について「変化あるいは出現の状況を表す」と概括し、「a)ある何らなかの状況がすでに出現している、あるいはもうすぐ出現しそうである、b)ある何らかの条件の下で何らかの状況が出現する、c)認識、考え、主張、行動などに変化が生じる、d)聞き手に行動を促す、あるいは行動を思い止まらせることを表す」と四つの意味を析出する。共通して「変化」、「出現」が中心的な意味に据えられていることが読み取れよう。a)、b)、c)、d)いずれの説明、用例にも共通してうかがえるのは「話者の視点」であり、話者が実際に「存在」として認知した「已然/実現、未然/未実現」の事象をどう客観的に認知しているかを叙述しようとするものである。未然の事象であっても、話者の認知的心理空間

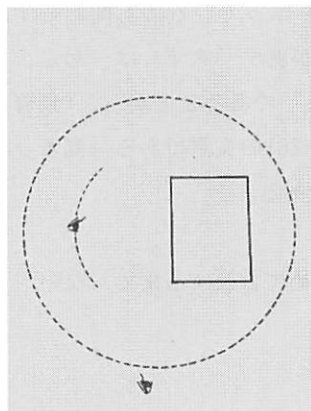
においては、すでに存在を認知されているため、その事象が顕現しているか、いないかの区別がある特定の表現形式を伴って示され、b)、c)のような表現となる。

### 5.1 スキャニング（心的走査）

認知言語学では「心的走査 mental scanning」という概念を提起する<sup>46</sup>。本稿では同じ意味で「スキャニング scanning」と表現することにしたい。話者が事態の開始から、経過、完了に至るプロセスについて観察（認知）する心理活動を指す。

スキャニングは本来、話者が空間におけるヒト、モノの移動を目視しながら連続的に追い続ける（観察する）精神的活動を意味し、それが時間軸における一連の経過について観察（認知）する意に拡張される。これを一般的には「変化」と称する事が出来るであろう。「了<sub>1</sub>」は動作、行為について、話者が現場立脚型視点からスキャニングを行い、それが終了した事を客観的に示す標識であると言うことが出来る。一方、「了<sub>2</sub>」は事態の推移について、話者が俯瞰的視点からスキャニングを行い、それが終了した事を客観的に示す標識であると言うことが出来る。

図 2<sup>47</sup> 自己の視点を含んだ世界を見ること



### 5.2 “他吃了饭了。”

吕文华(1983:pp.31)は対外漢語教学の観点から“了”が文の成立にどう関わるか述べた先駆的な論文である。文の語気が整わず、独立した文と成ることが出来ない形式には、文末に“终结”を表す語気助詞“了”を添えることで、文が完結すると述べる。例えば、

(22) 妈妈洗了衣服了。

<sup>46</sup> 辻幸夫（2013:185）参照。

<sup>47</sup> 宮崎清孝・上野直樹（1985:82）「図 4.5 自己の視点を含んだ世界を見ること」より引用。

- (23) 他看了电影了。  
 (24) 他们照了相了。  
 (25) 他吃了饭了<sup>48</sup>。  
 (26) 我们到了上海了。

では、なぜ語気助詞の“了”を添えることで文が完結するのかについての理由は述べられていない。“了<sub>2</sub>”が話者の発話時におけるスキヤニング終了の標識とする観点に立てば、スキヤニングの結果<V 了 O><sup>49</sup>によって示される動作・行為が終了した事が確認され、それ以上継続しない事を示すからに他ならない。

上掲(22)から(25)“洗衣服”(洗濯する)、“看电影”(映画を見る)、“照相”(写真を撮る)、“吃饭”(食事をする)が“了<sub>2</sub>”を必要とするのは、いずれも場所、時間が指定された個別の行動を指してはおらず、具体性を伴わない「総称」としてのそれらの行動が“终结”するためには、改めて具体性を付与する必要があり、それを話者の視点としてスキヤニングに基づく「事実確認」の標識である“了<sub>2</sub>”によって補完するからであると解釈することが出来る。

では例(26)“到了上海”(上海に着いた)は具体的な地名を伴っているにも関わらず“了<sub>2</sub>”を必要とするのはなぜなのであろうか。“到了上海”が表す「完了」は、起点、経路を伴わない「瞬間動詞」としての“到”に接辞する“了<sub>1</sub>”であることから、「到着した後の状態」(已然である事)を指すことが考えられる。例(26)の文意である「到着」を表すためには、“了<sub>2</sub>”による「事実確認」が求められるのである。

### 5.3 “我学了三年汉语了。”

<V 了 O>に数量表現を伴うと継続の意味が生じることは改めて言及するまでもない。例えば、

- (27) 我学了三年汉语。(私は中国語を3年学んだ。)  
 (28) 我学了三年汉语了。(私は中国語を3年学んでいる。)

例(27)は過去のある時点において3年間中国語を学んでいたが、今はその学びを終えている事を表す。“了<sub>1</sub>”もスキヤニング実行の標識として動作・行為が開始、進行、完了のプロセスを経て終了する事を表し、数量表現と共に共起する事で、当該の動作・行為が到達

<sup>48</sup> “吃了饭了”を北京大学中国語学研究中心 CCL データベース「現代漢語」で検索すると3例、「古代漢語」では《金瓶梅》崇貞本3例を初出として全11例が検出されるのみである。

<sup>49</sup> <V 了 O>が単音節動詞と修飾語を伴わない単純な構造の賓語から構成される場合、文意が已然であるか未然であるかは一般に中立であると考えられる。その理由は、動詞も賓語である名詞も個体化の段階が十分ではないからであると言えよう。



点に達し、その後の状態、この文では学びを終えた後の状態が持続している事を表す。

例(28)は話者の視点が発話の現在に置かれている事から、発話の時点で“学了三年”の事態に到達しており、学び始めてから3年を経過している事を表す。発話の時点で一旦スキヤニングは終了するものの、数量表現を伴う文においては、新たな起点が設定され、次の段階に対するスキヤニングが開始される事を含意するため、発話時点における完了と同時に、開始、進行義が派生するものと考えられるのである。

## 6 おわりに

中国語における「文法化」とは、一般に実詞（内容語）が実義としての働きを弱め、虚詞（機能語）化（虚化）することを指す。動機付けから考えられる文法化の本質（虚詞の本質）は、個から類へと総称化した名詞、あるいは動詞を、実体のある個の意味領域へと引き戻す役割を担うことにあると考えられる。虚化した語は実体としての意味を失うのと引き換えに、虚詞として結びつく語に焦点を当て実体化することにある。

本稿は「空間の文法化」という概念を提起することで、抽象化された語に何らかの文法的な措置、操作を加えることにより、記号<sup>50</sup>としての文が、ある特定の文脈、場面において具体的、個別的事象を表す、すなわち「空間化」することを主張する。量詞が名詞に対して担う「個体化機能」もこのような意味では広義の文法化に位置付けが可能であると言うことができよう。“了<sub>1</sub>”は接辞する動詞を現実の事実として空間化するために（顕在的、潜在的に）量的表示を求め、“了<sub>2</sub>”は認知の結果として、文全体を（已然もしくは未然の）事実として捉え現実の空間に位置付ける働きを担うと解釈することで、両者の機能を合理的に整理することが可能である。このような文法的機能を支える根拠として、本稿では“了<sub>1</sub>”、“了<sub>2</sub>”ともに「話者のスキヤニング実行の標識」説を提示した。

中国語は「象形性に富んでいる」<sup>51</sup>と指摘されるが、「象形性に富む」とは叙述に具体性を求める（指向する）ことに外ならず、中国語が具体性を求める動機付けとは何か、この具体性とはどのような事象（言語現象）を指すのか、本稿では“了<sub>1</sub>/了<sub>2</sub>”に対する理論的考察を通じて、この問いに対する解決の糸口を見出すことが出来たものとする。

## 7 余論

虚詞は実詞の参照点 landmark（以下 lm と略称）として働き、実詞を対象 trajector（以下 tr と略称）と見立てる事が可能である。例えば「介詞“在”＋名詞（句）“黑板上”」という介詞構造が<lm+tr>であり、この介詞構造が実詞、この場合には動詞（句）

<sup>50</sup> 言語は情報伝達手段として高度な構造と体系を持った「記号の体系」であると言える。その全体はメタファー、メトミニーとして機能していることを考えると、言語は基本的にメタファーの体系、すなわち「記号としての言語の本質はメタファーである」と言うことが出来よう。

<sup>51</sup> 香坂順一（1974:25-27）参照。

“写字”に対して lm として機能している二重構造を成しているものと見立てることが出来る<sup>52</sup>。すなわち、

{lm (介詞 lm+名詞句 tr) +tr (動詞句)}

在 黑板上 写字

という図式によって示すことが出来る。

中国語は<既知(旧情報)+未知(新情報)>という情報構造を原則とする。この<lm+tr>はこの原則に符合し、修飾構造はすなわち<lm+tr>であり、「流水句」と呼ばれる文もまた tr が次の新情報に対する lm となり、このような事象は<lm+tr>のロールプレイングに外ならない。「主述構造」における主語と述語の関係も当然<lm+tr>であると考えられる。このような前提に立てば、中国語における情報構造を概括的に捉えることが可能となるであろう。

#### 参考文献

- [01] 荒川清秀 1979 「“走 zou”と“給 gei”の意味・用法について」、『愛知大学外国語研究室報』第3号 (pp.31-39)。
- [02] 大河内康憲 1985 「量詞の個体化機能」、日本中国語学会『中国語学』第232号 (pp.1-13)。
- [03] ————1997 「中国語の人称名詞と“们”」、大河内康憲著『中国語の諸相』(pp.75-85)。
- [04] 大島吉郎 1991 「存現文における現象の発生と終息—‘下雨了’と‘雨住了’—」、大東文化大学『外国語学会誌』第20号 (pp.1-11)。
- [05] ————2013 「存現文における発話の意図に関する若干の考察—動詞“有”の例を中心に—」、大東文化大学大学院『外国語学研究』第14号 (pp.15-23)。
- [06] ————2021 「中国語における「状態」についての試論—「状態」をどう規定するか」、大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻『中国言語文化学研究』第10号 (pp.11-29)。
- [07] ガイ・ドイッチャー著、椋田直子訳 2022 『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』、早川書房。THROUGH THE LANGUAGE GLASS *Why the World Looks Different in Other Language* by Guy Deutscher
- [08] 木村英樹 1997 「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」、『大河内康憲教授退官記念中国語学論文集』、東方書店 (pp.157-179)。
- [09] ————2011 「中国語文法研究に見る認知言語学の成果と課題」、『中国語学』第

---

<sup>52</sup> “黑板上”における“黑板”と“上”の関係は、“黑板上(面/頭/辺)”から考えると、“黑板”が lm、“上”が tr であると認められる。

258号、東方書店 (pp.24-64)。

[10] ——2011 「「存在文」が表す〈存在〉の意味及び‘定不定’の問題」、桜美林大学孔子学院《漢語与漢語教学研究》第2号、東方書店 (pp.3-15)。

[11] ——2017 『中国語はじめの一步〔新版〕』、筑摩書房。

[12] 行場治郎 1995 『認知心理学重要研究集 1 視覚認知』、誠信書房。

[13] 香坂順一 1974 『中国語学の基礎知識』、光生館。

[14] 酒井邦嘉 2002 『言語の脳科学—脳はどのようにことばを生みだすか』、中央公論新社。

[15] ——2019 『チョムスキーと言語脳科学』、集英社。

[16] 瀬戸賢一 1995 『空間のレトリック』、海鳴社。

[17] 高橋弥守彦 2022 「実質視点と話題視点」、『大東文化大学紀要<人文科学>』第60号 (pp.239-256)。

[18] 辻幸雄編 2013 『新編認知言語学キーワード事典』、研究社。

[19] 町田茂 2015 「试论基于 [+Reality] 特征的现代汉语语法框架」、朝日出版社『現代中国語研究』第17期 (pp.58-77)。

[20] 宮崎清孝・上野直樹 1985 『認知科学選書 1 視点』、東京大学出版社。

[21] 魯曉琨 2022 「文末の“了 a”と“了 b”」、一般財団法人日本中国語検定協会『中国語の輪』第120号 (pp.13-14)。

[22] 盧 濤 2000 『中国語における「空間動詞」の文化研究：日本語と英語との関連で』、白帝社。

[23] 陈前瑞 2005 句尾“了”将来时间用法的发展、《汉语教学与研究》第1期 (pp. 66-73)。

[24] ——2017 语序接触与北京话双“了”句的历时波动、《语法化与汉语时体研究》学林出版社 (pp. 78-98)。

[25] 陈小红 2010 论“了2”不独现、《汉语学习》第3期、(pp.54-63)。

[26] 范晓蕾 2021 《普通话「了1」「了2」的语法异质性》、北京大学出版社。

[27] 何 薇 2020 《现代汉语动作动词及其动作性研究》、苏州大学出版社。

[28] 洪心衡 1957 《能愿动词、趋向动词、判断词》、新知识出版社。

[29] 胡孝斌 2008 語法化和詞彙化的共同作用—談 VV 的句法性質、《語言教学与研究》第4期 (pp.18-24)。

[30] 李 明 2004 趋向动词“来/去”的用法极其语法化、《语言学论丛》、商务印书馆 (pp.291-313)。

[31] 李 永 2014 《汉语动词语法化的多视角研究》、山东大学出版社。

- [32] 刘翔·陈抗·陈初生·董琨 2017 《商周古文字读本（增补本）》、商務印書館。
- [33] 呂叔湘 1944 《中国文法要略 中卷》、商務印書館。
- [34] 吕文华 1983 “了”与句子语气完整及其它、《语言教学与研究》第 3 期、(pp.30-39)。
- [35] 马贝加 2014 《汉语动词语法化(全二册)》、中华书局。
- [36] 杉村博文 2006 句尾“了”的语义扩张及其使用条件、《汉语教学学刊》第 2 辑、(pp.87-98)。
- [37] 沈家煊 2021 “二”还是“三”——什么是一个最小流水句、中山大学中国语言文学系《汉语语言学》编委会《汉语语言学》第 1 辑、(pp.5-34)。
- [38] 谭春健 2004 句尾“了”构成的句式、语义及语用功能、《汉语学习》第 2 期、(pp.26-31)。
- [39] 玄 玥 2018 《完结范畴与汉语动结式》、商务印书馆。
- [40] 王 巍 2018 《语气词“了”的隐现规律研究》、中国社会科学出版社。
- [41] 杨惠芬 1984 动态助词“了”的用法、《语言教学与研究》第 1 期、(pp.41-45)。
- [42] 張志公主編 1956 《語法和語法教学—介紹“暫擬漢語教学語法系統”》、人民教育出版社。